

# 第3部 個別研究成果報告

## 中山間地の人口変遷と生業

—岩手県一関市巖美町本寺地区を事例として—

竹原万雄

### はじめに

歴史班では主に中世から近・現代の時間幅で「集住の関係史」と総称する研究を進めている。具体的には、土地や水面といった集落の形成・維持の前提となる空間の所有・活用状況など、時代や地域ごとの集落結節の様態を捉え、その時期その土地にそのバランスで存立した背景を解明するというものである。そこで筆者は、岩手県一関市巖美町本寺地区を事例として、人口・景観・生業という視点から中山間地集落が維持されてきた背景を追究している。

かつて「骨寺村」と称した本寺地区は、中世に描かれた「陸奥国骨寺村絵図」の場所として知られている。しかも絵図の景観が現在でも良好な状態で残っており、国の史跡や重要文化的景観にも選定された。本寺は断片的ではあるものの各時代の史料が残されており、「陸奥国骨寺村絵図」から中世の景観をうかがうことができる貴重な地域であるだけでなく、近世・近代の文書群も伝来していることに加え、現代の実地調査も積極的に実施されてきた。以上のことから、本寺地区は中世から現代までの集落変遷を見通すうえで有効な調査対象地といえよう。

これまでは『東北一万年のフィールドワーク11 本寺 山間に息づくむらの暮らし』[東北芸術工科大学東北文化研究センター編2014]、「戦後本寺地区における景観変遷」[竹原他2014]、「中山間地生業の変遷 - 岩手県一関市巖美町本寺地区を中心に -」[竹原2012]、「中山間地、骨寺村の生活 - 近世・近代への展望 -」[竹原2009]などで、中山間地で営まれた生業とそれによって生ずる景観変遷について明らかにしてきた。本論では、とくに人口変遷と生業との関わりに注目しながら長期間にわたって中山間地集落が維持された背景の一端を検討したい。

なお、本論で主として使用する文書群は、本寺地区に残されていた「陸奥国磐井郡五串村本寺佐藤家文書」(以下、「本寺佐藤家文書」と略す)と、隣接する山谷地区に伝来した「陸奥国磐井郡五串村山谷佐藤家文書」(以下、「山谷佐藤家文書」と略す)である。

### 1 本寺の概要

人口変遷の分析に先立ち、本寺の歴史を簡単に振り返っておこう [東北芸術工科大学東北文化研究センター編2014]。骨寺村がはじめて史料に登場したのは天治3(1126)年に藤原清衡によって発給された「中尊寺経蔵別当補任状案」であった。この文書には「紺紙金銀字交書一切経」の書写に尽力した自在坊蓮光を経蔵の別当に任命することに加え、蓮光の私領であった骨寺村を経蔵別当領として認めたことが記されている。ここに中尊寺経蔵別当領としての骨寺村が誕生した。

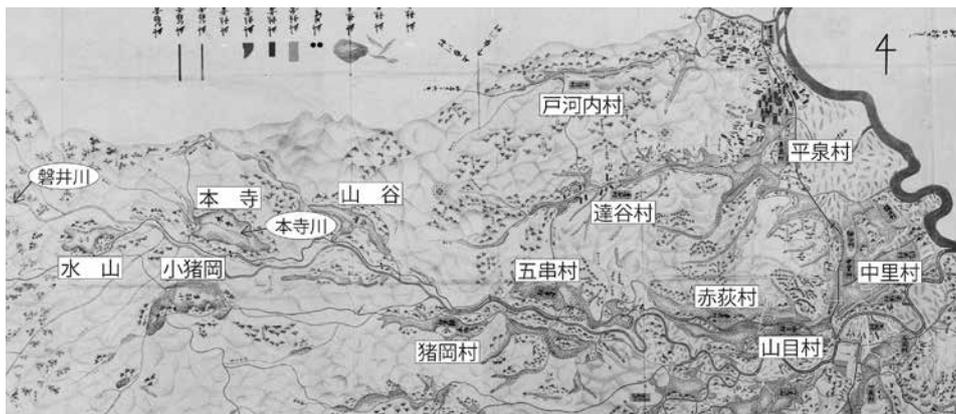
文治5(1189)年、奥州藤原氏の滅亡後も骨寺村は経蔵別当領として承認された。しかし、藤原氏に代わって平泉を支配した葛西氏と中尊寺との間でたびたび村境をめぐる争いが起こっていた。中尊寺には永享7(1435)年までの骨寺村に関する記録が残されていることから、室町時代までは経蔵別当領として維持されていたようである。

天正18(1590)年の葛西氏滅亡後、骨寺村を含めた現在の岩手県南部は伊達政宗の所領となり、明治維新まで仙台藩領であった。仙台藩時代は奥郡郡奉行の支配下にあり、山目町に代官所やまのめがおかれていた。江

江戸時代を通してみると、「骨寺村」は「本寺」と表記されるようになり、隣接する山谷とあわせて磐井郡西磐井五串村の端郷であった。「骨寺村」がいつ「本寺」と表記されるようになったのかは判然としないが、元禄12（1699）年に生江助内が作成した「磐井郡西岩井絵図」（残されている原物は明治21（1888）年、千葉美胤写）には「本寺」とあり、少なくともこの頃には一般化していたことがわかる。なお、【図1】はその絵図をつかって本寺・山谷・五串村と隣接する村々の位置関係を示したので参照されたい。

明治期以降の本寺は、五串村とともに明治4（1871）年の廃藩置県によって一関県に属し、それ以後、水沢県、磐井県と改称され、明治9（1876）年には岩手県へ編入となる。その後、明治22（1889）年に巖美村、昭和30（1955）年に一関市巖美町となり、現在に至っている。

【図1】本寺と近隣地区位置図



※「磐井郡西岩井絵図」（写、個人像）より作成

## 2 本寺の人口変遷

### (1) 本寺の戸数と人口変遷

【表1】は中世から現代に至るまでの本寺の戸数と人口を整理したものである。史料が断片的にしか残っておらず、確定し難い数値もあるが、本表から約800年間の本寺の戸数及び人口の変遷をみてみたい。

本寺の戸数がわかる最も古い史料としては文保2（1318）年の「骨寺村所出物日記」があげられる。貢納者と品目等が書き上げられたこの文書からは、当時、性格の違う二つの農民層がいたことがわかる。ひとつは年貢・公事を賦課された農民であり、もうひとつは年貢のみを請け負う農民である。ここから、前者は当初からの在地農民であり、後者は骨寺村の開発に関わった新入の農民であることが指摘されている。新たな農民が入ってきたのは平安時代末と考えられていることから、【表1】ではそれ以前に在地農民が5戸、文保2（1318）年に新入農民を含めた13戸があったものと推定した〔伊藤1957、大石1984、吉田1989、一関市博物館編2008〕。なお、この戸数は鎌倉時代末期に作成されたとされる「陸奥国骨寺村絵図（詳細絵図）」で描かれた屋敷数とも一致している。

次は、同じく貢納者と品目等が書き上げられた「骨寺村在家日記」である。この文書は南北朝時代に作成されたものと考えられており、書き上げられた在家や水田の数から17戸程の農民がいたものと推定できる〔吉田2008〕。

江戸時代になると、先述したとおり「骨寺村」は「本寺」と表記されるようになり、隣接する山谷とあわせて五串村の端郷となる。そのため、この時期の史料には本寺・山谷がセットになって登場することが多い。そこで【表1】では「本寺・山谷」という項目を立て、本寺の戸数・人口を推定している。江戸時代で戸数がわかる最も古い史料としては、元禄12（1699）年作成の「磐井郡西岩井絵図」があげられる。この絵図には本寺に21戸の屋敷が描かれているが、西磐井という広範囲を描いた絵図という性格から各村

【表1】戸数・人口変遷表

年代	戸数		人口		出典
	本寺	本寺・山谷	本寺	本寺・山谷	
平安時代末以前	[5]				骨寺村所出物日記
文保2 (1318)	[13]				骨寺村所出物日記
鎌倉時代末期	[13]				陸奥国骨寺村絵図
南北朝時代	[17]				骨寺村在家日記
元禄12 (1699)	[21]				磐井郡西岩井絵図
享保12 (1727)	[48]	91	[654]	1159	宗門人別帳(「本寺佐藤家文書」〈人別・戸籍-1〉)
宝暦13 (1763)	105	195			「宝暦風土記」(『一関市史 第7巻』)
安永4 (1775) カ		[197]		[955]	「安永風土記」関係(「山谷佐藤家文書」〈43〉)
天保5 (1834)		155		921	宗門人別帳(『一関市史 第7巻』)
天保10 (1839)	[74]	139	[272]	573	宗門人別帳(「本寺佐藤家文書」〈人別・戸籍-2〉)
安政6 (1859)		119		775	宗門人別帳(「山谷佐藤家文書」〈46〉)
明治10 (1877)	[63]	118	[433]	874	戸数人員書上(「山谷佐藤家文書」〈226〉)
明治11 (1878)	山谷戸数55		山谷人口441		戸数人員書上(「山谷佐藤家文書」〈200〉)
[大正6 (1917)]	85	161	669	1290	『巖美村誌』
昭和62 (1987)	125		531		一関市役所提供資料
平成4 (1992)	119		517		一関市役所提供資料
平成9 (1997)	120		474		一関市役所提供資料
平成14 (2002)	121		438		一関市役所提供資料
平成19 (2007)	116		375		一関市役所提供資料
平成24 (2012)	116		340		一関市役所提供資料

※ [ ] は不確定あるいは推定数。「戸数」のうち宗門人別帳の数値は人頭(戸主)の数、昭和62年以降は世帯数。天保10年の宗門人別帳の人頭数は不在の土地・屋敷を差し引いた数。「出典」のうち「安永風土記」関係とあるものは「安永風土記」作成のための調査過程で作られた文書とおもわれる。

の戸数を正確に描いているとは考えにくい。そのため参考までに不確定の数として提示した。それ以降は、江戸時代の戸籍として知られる宗門人別帳と仙台藩の村の概要を知るうえでの基本史料である、いわゆる「宝暦風土記」と「安永風土記」に関係するとおもわれる文書からである。そのため、これまでよりも信憑性が高い数値といえよう。

近代に入ると明治22(1889)年に巖美村に合併することもあり、本寺だけの情報を知ることが難しくなる。そのため、明治10年代以降は大正6(1917)年発行の『巖美村誌』に掲載された数値しか見出すことができない。戦前・戦後についても同様で、近年については一関市役所からご提供いただいた史料を参考にした。

以上のようにして収集した【表1】を読み解いていくと、まず平安時代末に骨寺村の開発に関わった新入農民による増加が推定され、江戸時代に入ると享保期から安永期の約50年間で戸数は大幅に増加する一方、人口は減少している。この戸数と人口の関係については、享保年間と天保年間の宗門人別帳を比較すると、大家族構成から小家族構成へと変化したことがわかる[竹原2009]。つまり、人口が減っているにもかかわらず戸数が増えているのは、一家族からの分家・独立が進んだためである。それから約60年後の天保期には戸数・人口共に減少、続く約40年後の明治10(1877)年には戸数は減少しつつも人口は増加している。しかし、享保期までには至らず、大正期によりやく回復が確認できる。それから第二次世界大戦・高度経済成長を経た70年後の昭和後半から現代までは再び減少傾向にある、と整理できよう。

## (2) 人口変遷の背景

【表1】のような人口変遷にはどのような背景があったのであろうか。そこで【表2】では、信憑性が高い江戸時代以降について歴史人口学の成果[鬼頭2007]をふまえながら、本寺の人口と参考として「東

奥羽」の人口、加えて人口変遷に関わる背景を「想定背景」として整理した。なお、「想定背景」については本論の主題にあわせて農村部の生業に関わる点を中心にまとめている。

18世紀初期までの江戸時代前期は人口成長の世紀であった。「東奥羽」をみても慶長期から享保期にかけて3倍以上に人口が増加している。その背景としては、新田開発と土地生産性の向上、それに加えて室町時代以来の貨幣経済の広がりにより、農業社会にも市場で物を購入する市場経済化が進んだことが指摘されている。一方、本寺に関しては17世紀の人口がわからないため増加したか否かの正確な判断はできないが、享保12（1727）年は情報がある限りで江戸時代を通して最も多い人口であること、また先述した一家族内からの分家・独立が進むほどの活力を考慮すると、大幅な人口成長があったことは十分に想定できるのではなかろうか。

江戸時代の中・後期については全国的には人口停滞の時代と位置づけられているが、東日本は減少傾向といえよう。「東奥羽」をみても天明期に底をつき、寛政・文化期には増加傾向にあるが享保期までには回復していない。本寺も享保期から安永期にかけては減少傾向がみとれる。その背景には18世紀を中心に「小氷期」とも呼ばれる寒冷気候が続き、その影響もあって飢饉や疫病が流行したことが指摘されている。とくに陸奥はこうした人口危機があった災害年の死亡率が高く、死別した夫婦が多かったために平常年の人口増加が追いつかなかったこと、加えて栄養不足の影響もあった。また、森林をはじめとする環境資源に対して人口増加と経済成長が圧力となり、人口が増える余地がなくなったことも原因としてあげられている。

続く幕末・維新时期は天保の飢饉による人口減はあるが、その前後では増加傾向にあり、近代人口成長の始動期とされている。本寺でも天保期に半数近く的大幅人口減を経て少しずつ回復をみせている。その背景としては、18世紀半ば頃からの「プロト工業化」と呼ばれる経済発展があげられる。プロト工業化とは本格的な工業化に先立ち、農村で広範囲に展開された工業化のことである。繊維業や醸造業をはじめとして種々の商業やサービス業の成長がみられた。プロト工業化が進むにつれて経済成長による生活水準の上昇、死亡率の改善、出生抑制の緩和の影響が強く働き、人口を支えるために再び新田開発が活発になった。この点を考慮すると、天保期以前の19世紀初頭は本寺でも増加傾向にあったのかもしれない。その一方、天保期の人口減を生んだ凶作や疫病の流行によって死亡率の著しい改善はみられなかったことも指摘されている。

明治時代は工業化社会を生み出した産業革命が未曾有の経済成長と人口成長をもたらした。こうした近代工業化の成功が、続く大正・昭和前期には活発な投資活動と急速な技術導入につながり、経済成長は上昇傾向にあった。しかし、農業は化学肥料産業の成長はみられるものの、在来的な農業技術の全国普及の完了と耕地拡大の限界などにより1920年代から落ち込みをみせた。その間も人口は増加傾向にあり、本寺でも大正期には確認できる最大の人口数を示していた。

第二次世界大戦中、人口は明治以来はじめて減少する。しかし、戦後は戦地や植民地からの軍人や在外邦人の引き揚げによって急激に増加した。こうした急激な人口増加の受け皿となったのは農村であったという。その後、1960年代に入ると高度経済成長がはじまり、非大都市圏から大都市圏への人口移動は農林水産業から製造業・サービス業への産業構造の転換を支えた。その結果、大都市圏では人口の過密を生み、農山漁村では過疎化が進むようになる。1970年代には高度経済成長も終わるが、過密・過疎問題は止まらず、少子化もはじまった。1980年代に入ると人口増加率は低下し、2005年には戦時期を除くと近代統計史上はじめての人口減少を記録した。

【表2】をみると「東奥羽」では平成7（1995）年をピークに平成17（2005）年には減少に転じている。一方、本寺は大正期の次に確認できる昭和62（1987）年にはすでに減少傾向がみられる。この70年の間には激動の戦中・戦後・高度経済成長期が含まれるが、「東奥羽」の人口増と「想定背景」をふまえると、この間に戦後の増加は経験しているとおもわれる。

【表2】人口変遷とその背景

年代	人口		年代	人口 東奥羽	想定背景
	本寺	本寺 山谷			
			慶長5 (1600)	73万4,400	新田開発／土地生産性の向上／市場経済化の進展
享保12 (1727)	[654]	1159	享保6 (1721)	235万5,400	
			寛延3 (1750)	220万3,400	飢饉と疫病／災害年の死亡率が高く、平常年の人口増が追いつかない／栄養不足／人口に対する環境の限界
			宝暦6 (1756)	216万7,400	
安永4 (1775) カ		955	天明6 (1786)	187万6,500	
			寛政4 (1792)	188万1,900	
			文化1 (1804)	192万3,500	プロト工業化／新田開発／飢饉と疫病
			文政5 (1822)	198万800	
			文政11 (1828)	201万6,100	
天保5 (1834)		921	天保5 (1834)	202万8,600	
天保10 (1839)	[272]	573	天保11 (1840)	180万7,400	
			弘化3 (1846)	192万9,500	
安政6 (1859)		775			
			明治6 (1873)	230万6,000	工業化（繊維産業を主導部門とする軽工業中心から日清戦争後は重化学工業化へ）
明治10 (1877)	[433]	874	明治13 (1880)	247万8,200	
			明治23 (1890)	294万7,600	
			明治33 (1900)	346万3,900	
[大正6 (1917)]	669	1290	大正9 (1920)	392万6,600	近代工業化の成功による活発な投資活動と急速な技術導入で経済成長は上昇傾向 化学肥料産業の導入 農業成長は1920年代から落ち込む…農業技術の全国普及の完了／耕地拡大の限界
			昭和25 (1950)	635万5,400	農村が引き揚げによる急激な人口増加の受け皿に 1960年代の高度経済成長により農林水産業から製造・サービス業へ…大都市圏への人口移動・農山漁村の過疎化
			昭和50 (1975)	678万100	1974年に高度経済成長が終わる 過密・過疎問題が進む
昭和62 (1987)	531				2005年に減少に転じる
平成4 (1992)	517		平成7 (1995)	736万3,500	
平成9 (1997)	474				
平成14 (2002)	438				
平成19 (2007)	375		平成17 (2005)	727万3,200	
平成24 (2012)	340				

※「東奥羽」の「人口」と「想定背景」は【鬼頭2007】を参照した。

【表3】人口変遷とその背景の整理

人口変遷	想定背景
享保期までの増加	新田開発／土地生産性の向上／市場経済化の進展
享保期から安永期で減少	飢饉と疫病／災害年の死亡率が高く、平常年の人口増が追いつかない／栄養不足／人口に対する環境の限界
19世紀初頭の増加	プロト工業化／新田開発
天保期に減少	飢饉と疫病
幕末・明治・大正期にかけて増加	工業化／農業成長の進展 ※1920年代に落ち込むカ
戦後の増加	戦後の引き揚げ／高度経済成長
昭和後半から減少	高度経済成長の終焉

※【表2】から推測したものに網掛けをした。

以上から、本寺の人口変遷を改めて整理したものが【表3】である。そのうち人口増に注目すると、17世紀と19世紀、さらに天保期に減少するもののそれからは戦時中まで増加傾向が続いている。その背景としては新田開発を含む農業成長、市場経済化や工業化が想定されるが、本寺の生業からこれらの背景はど

れだけあてはまるのであろうか。そこで次章では、現在確認できる限りでの人口増を支えた生業についてみてみたい。

### 3 本寺の人口変遷と生業

#### (1) 江戸時代から明治初期の生業

【表4】は江戸時代から明治初期にかけて確認できる本寺の生業について整理したものである。まず新田開発からみてみよう。なお、仙台藩では寛永17(1640)年から20(1643)年まで行われた「寛永検地」のときの田畑を本地とし、その後に開発された土地を新田といった〔仙台藩歴史用語辞典2010〕。万治2(1659)年の「西磐井之内猪岡村五串村新田御検地野帳」(「本寺佐藤家文書」〈土地-1〉)から17世紀の新田開発の面積と石高がうかがえる。ここでは本寺だけでなく山谷・五串村などの新田も書き上げられているが、そのうち本寺と思われる地名(本寺原・本寺・中川沢・市の原・若井・牛首戸)を抽出し、面積と石高を算出すると、面積が10町1反3畝10歩、石高が62石4斗1升になる。

続いて享保期(「本寺佐藤家文書」〈人別・戸籍-1〉)と天保期(「本寺佐藤家文書」〈人別・戸籍-2〉)の宗門人別帳からわかる新田高をみると、享保期が60石9斗6升、天保期が128石4斗2升であり、約100年の間で70石弱の開発が進んだことがわかる。もっとも宗門人別帳は本寺だけでなく山谷も含んだ数値であり、万治2(1659)年の段階で62石余の開発があったにもかかわらず享保期の新田高は山谷を含めてもそれより低いため、これらの文書からどれだけ新田開発が進んだかを判断することは難しい。しかし、17世紀から19世紀にかけて新田開発が進められていたことは確認できるであろう。

次に「安永風土記」にある産物を見てみよう。『一関市史 第2巻』には一関市各村の「安永風土記」に書き上げられた産物がまとめられている。それによると、半数以上の村で1~2品、多い村だと5品の産物があげられており、全体をみると麻・紅花・煙草が多く見受けられる。一方、本寺・山谷・五串村では煙草や麻もあるが、それ以外にも真綿や絹まゆに加え、鋏台・足駄・山折敷おしきといった木工品が多くあげられている。しかも、その数は7品にも及んでいる。さらに明治6(1873)年の「地誌提要書上」から産

【表4】江戸・明治初期の人口変遷と生業

人口変遷	年代	新田	諸役・産物	出典【対象地区】
享保期までの増加	万治2 (1659)	10町1反3畝10歩 62石4斗1升		新田検地帳(「本寺佐藤家文書」〈土地-1〉) 【「本寺原」「本寺」「中川沢」「市の原」「若井」「牛首戸」】
享保期から安永期で減少	享保12 (1727)	60石9斗6升		宗門人別帳(「本寺佐藤家文書」〈人別・戸籍-1〉) 【本寺・山谷】
	享保14 (1729)		諸役:清酒(1)・室師(4)・鍛冶(1)・大工(2)・木挽(5)・染師(4)・須川出湯役・獵師鉄砲(26)	諸役改指出(「本寺佐藤家文書」〈年貢-1〉) 【本寺・山谷・五串村】
	安永4 (1775)		産物:煙草・山おし木・麻・鋏台・足駄・真綿・絹まゆ	「安永風土記」 『一関市史 第7巻』 【本寺・山谷・五串村】
19世紀初頭の増加				
天保期に減少	天保10 (1839)	128石4斗2升		宗門人別帳(「本寺佐藤家文書」〈人別・戸籍-2〉) 【本寺・山谷】
幕末・明治・大正期にかけて増加	明治6 (1873)		産物:鋏柄・下駄・足駄・糞板・へら・しゃくし・まだ縄・炭・紺屋灰	「地誌提要書上」(岩手県永年保存文書)【本寺・山谷】

※享保期と天保期の宗門人別帳の新田高は出入作分を含めていない。

【表5】「生産額」一覧

種目	1ヶ年の収入	備考
自村内生産価金額高	19万8,500円	農産物12万5,000円、畜産1万2,000円、林産6万円、工産1,500円
自村民の他町村に有する土地より得る収入	1,300円	郡内他町村950円、郡外他町村330円、県外30円
自村民より小作人の他町村において小作を為し得る収入	80円	郡内他町村80円、他になし
商業利益	8,400円	旅館・飲食店・米穀商・牛馬売買業・菓子製造販売、その他一般物品販売業等
恩給・年金・株券利益配当・有価証券利益配当金・貸金利息	7,012円	恩給1,163円、年金400円、株券利益配当200円、貸金利息4,650円、預金利息500円、有価証券利益配当100円
職工労働者の得る賃銀	1万2,500円	職工業7,000円、労働者5,500円
他町村民の本村に納むる租税	19円	
前各項以外の収入	8,038円	官公吏・教員・医師・神官・僧侶・官公署雇傭員・手代・番頭・女中・家賃他、町村奉職者・出稼者、その他各収入
合計	23万5,850円	

※年代は明記されていないが『巖美村誌』が発行された年代と【表9】から推測すると、大正5（1916）年と思われる。  
【表6】～【表8】も同じ。

物をみても、「安永風土記」にもみられた鋤柄（鋤台）・足駄に加えて下駄・糞板・へら・杓子・炭・紺屋灰などと木工品の種類が増えている。

また、商人や職人の営業許可税、生産物に対する売上税など様々な種類の税目をまとめた「西岩井五串村諸役改指出し」（「本寺佐藤家文書」〈年貢－1〉）をみると、清酒1本・室師<sup>むろし</sup>4軒・鍛冶1人・大工2人・木挽<sup>こびき</sup>5人・染師4人・須川出湯役・獵師鉄砲26枚と書き上げられている。田畑や産物以外にもこうした職人や営業許可税を支払った生業を営んでいたことがわかる。

これらは五串村と山谷も含めた情報であるが、新田開発はもちろん、田畑以外にも多様な生業に取り組んでおり、とくに産物は他地域よりも積極的で、なおかつ明治初期と比較すると新たな産物の「開発」を模索していたこともうかがえる。こうした産物は、それを販売することで現金収入を得ていたのであろう。ここから「想定背景」にみた市場経済の進展やプロト工業化の影響を受けていた可能性も指摘できるのではなかろうか。

## (2) 大正期の生業

大正6（1917）年に発行された『巖美村誌』には、本寺を含めた巖美村の生業に関する情報がまとめられている。それらを整理しながら紹介することで、大正期における本寺の生業についてみてみよう。

まず巖美村の生業全体については「本村の生産は農耕を主とすれども、畜産及び製炭業に於て本郡樞要の地歩を占む、養蚕業の如きも、漸次発達的气運に向ひつゝありと雖とも、未だ幼稚の域にあるは遺憾とする所なり」（史料は読みやすいように適宜改め、読点・ルビを付した。以下同じ。）とあり、巖美村は農耕が主であるが、西磐井郡のなかでも畜産と製炭業では重要な役割を担っており、養蚕も発展の兆しをみせていると整理されている。農業を主としているという点では、「本村の現在戸数五百三十九戸、内農作業四百七十四戸、商業二十五戸、工業二十戸、其他二十戸なり、以上に依るに本村民乃職業ハ、殆んど農作業にして、村収入は農業生産を以て支配せられつゝあり」ともある。【表5】は『巖美村誌』に掲載されていた「生産額」の一覧であるが、ここからも農産物が最も高く、続いて林産、畜産と続いていることがわかる。

次にそれぞれの内訳をみてみよう。【表6】～【表8】は主要な農産物・林産物・工業産物をまとめたものである。主要農産物としてはやはり米が1位にあげられているが、注目したいのはこの表に続いて「米は猪岡・五串地方より多く産し、養蚕は五串・山谷・本寺最も盛なり」のように巖美村各地におけるそれ

【表6】 主要農産物

種類	米	麦	蔬菜	繭	豆	桑
金額	7万6,943円	1万502円	7,105円	5,927円	4,873円	4,127円

【表7】 主要林産物

種類	木炭	用材	薪
金額	5万1,525円	1万6,845円	7,130円

【表8】 主要工産物

種類	竹製品	大根切器械	金属製品	下駄類
金額	1,120円	700円	600円	275円

【表9】 養蚕飼育戸数

種別	五串	山谷	本寺	瑞山	猪岡	小猪岡
春蚕	12	22	18	15	15	25
夏秋蚕	18	24	21	9	16	14
計	30	46	39	24	31	39

※大正5（1916）年の統計より

それぞれの産地があげられている点である。ここから本寺は五串・山谷と並んで養蚕が盛んであったことがわかる。それにともない、養蚕飼育戸数もまとめられていた（【表9】）。戸数でいうと山谷が最も多く、本寺は小猪岡と並んで2番目であった。

続いて林産物をみると「製炭は瑞山・小猪岡・本寺最も盛にして、重に東京に移送す、用材としてハ杉・松・栗・櫟等を生せり、天然産物として栗実・菌類（シメジタケ・香茸・ムキ茸・推茸）の産多く、独活・蔞・蕨の生産亦尠からず」とある。本寺は製炭が盛んとあり、【表7】をみると木炭が1位であった。その他、栗や菌類についてもあげられているが、これらに関しては「本寺佐藤家文書」のなかでも関係文書が散見できる。例えば、大正3（1914）年には青森大林区署へ本寺の炭焼業について「炭焼ナキ者 戸数 式拾壱名」「炭焼専門 戸数 式拾式人 但し壺ヶ年壺人平均金七拾円」などと報告している（その他-3）。また、明治期のものではあるが、「区長御達日誌帳」〈村政-9〉のなかには明治22（1889）年に本寺地区内にある「コ、ミ立官林」から栗と雑菌を採集するための「副産物御払下願」が綴られていた。さらに「明治四拾四年度以降」と表紙にある「入林鑑札交付簿」〈その他-3〉には祭時山から菌茸を採集するための鑑札を交付された者、57名の名前が記されていた。

【表8】の工産物については「竹製品（籠・箆・養箔）、箸・篋・杓子は五串・瑞山に多く、大根切器械は五串に行はれ、下駄類は小猪岡・瑞山にて、金属類は各部落にて製作せらる」とある。本寺と特記されているものはないが、へら・杓子・下駄は江戸・明治時代の産物としてもあり、約200年の間、巖美地区の産物としてあげられる名産であったことがうかがえる。加えて、竹製品・大根切器械・金属類からは、新たな産物を「開発」していたともいえようか。

さらに牧畜業についても「畜類総数千百十五頭にして、馬千八十一頭、牛三十四頭あり、而して年々村内より生産する仔馬は百七十八頭内外ありて、其販売価額壺萬円前後に達し、秣供用地山林三十五町、原野二千八百余町にして尚余裕を存せり」とある。また、明治期のものであるが「本寺佐藤家文書」の「区長御達日誌帳」〈村政-9〉のなかには明治22（1889）年に巖美村長から区長宛に「来ル十一月廿七日、山目組二歳駒競売執行相成候条、登記之人名ハ二歳駒并□（公）馬、西磐井郡山目村山目組市場へ同日午前第八時遅滞ナク牽出候様、通達方取斗フヘシ」と指示されており、山目村で二歳駒の競売が行われていたことがわかる。この後には競売にかけられる馬が書き上げられており、本寺から売りに出した馬もいた。

以上、『巖美村誌』をもとに大正期の巖美村の生業について整理し、農業を主としながら林業・牧畜業・工産物を営んでいたこと、そのうち本寺では養蚕と製炭が特記されていたことを確認した。「本寺佐藤家文書」には明治・大正期の文書から製炭や栗・菌類、畜産に関するものが見受けられ、近代の本寺の生業

の一端を垣間見ることができた。こうした生業が大正期の人口増を支えていたのであろう。

## おわりに

本稿では中山間地集落が維持された背景を追究する一環として、岩手県一関市巖美町本寺地区の人口変遷と生業について検討した。いずれも断片的な史料ではあったが、江戸時代の17世紀・19世紀、明治期以降の人口増を確認し、それを支えた生業として田畑の新田開発や木工品を中心とした産物、とくに大正期には製炭と養蚕が特記すべきものであったことを確認した。しかし、現在確認できる史料からは生業の実態面はほとんどわからない。今後は、隣接地域の史料なども参考にしながら人口増を支えた生業の具体像に迫りたい。

### 【参考文献】

- 伊藤信1957「辺境在家の成立 - 中尊寺領陸奥国骨寺村について -」『歴史』第15輯
- 一関市史編纂委員会編1977『一関市史 第4巻 地域史』一関市
- 一関市史編纂委員会編1977『一関市史 第7巻 資料編(Ⅱ)』一関市
- 一関市史編纂委員会編1978『一関市史 第2巻 各説Ⅰ』一関市
- 一関市博物館編2008『奥州平泉中尊寺経蔵別当領 中世荘園骨寺村』一関市博物館
- 大石直正1984「中尊寺領骨寺村の成立」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第15号
- 鬼頭宏2007『[図説] 人口で見る日本史 縄文時代から近未来社会まで』PHP研究所
- 竹原万雄2009「中山間地、骨寺村の生活 - 近世・近代への展望 -」『季刊東北学』第21号 東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 竹原万雄2012「中山間地生業の変遷 - 岩手県一関市巖美町本寺地区を中心に -」  
『東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究 平成一九年度～平成二十三年度文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業「オープン・リサーチ・センター整備事業」研究成果報告書Ⅰ』東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 竹原万雄・菅沼信輝・早川由希子・三好明日美2014「戦後本寺地区における景観変遷」  
『文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「環境動態を視点とした地域社会と集落形成に関する総合的研究」平成25年度研究成果報告書』東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 東北芸術工科大学東北文化研究センター編2014『東北一万年のフィールドワーク11 本寺 山間に息づくむらの暮らし』東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 東北芸術工科大学東北文化研究センター編2009『陸奥国磐井郡五申村本寺(岩手県一関市巖美町) 佐藤家文書詳細目録・報告書』東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 吉田敏弘1989「骨寺村絵図の地域像」『絵図のコスモロジー 下巻』地人書房
- 吉田敏弘2008『絵図と景観が語る 骨寺村の歴史 ～中世の風景が残る村とその魅力』本の森  
『巖美村誌 復刻版』(巖美公民館 1987年 ※初版は1917年発行)
- 『仙臺郷土研究 特集 仙臺藩歴史用語辞典』(仙臺郷土研究会 2010年)